京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

近代京都と文化

Modern Kyoto and Culture

2. 研究代表者氏名

高木博志

Takagi Hiroshi

3. 研究期間

2019 年 4 月-2022 年 3 月

4. 研究目的

本研究では、近代の京都と文化を対象としつつ相対化する。今日、京都は、年間 5500 万人以上が訪れる世界でもっとも人気のある観光都市である。「日本文化を創り出してきた京都」、「おもてなしの文化」、雅な貴族文化などとバラ色に表象され、文化庁移転のうたい文句にもなる。こうした京都イメージは、近現代を通じて、政治的、社会的に創り出された側面が強い。それに対して近代京都の文化について、民衆の生活・花街の性・差別の問題といった周縁性や、文化をめぐる政治や地域社会とのかかわりなどを含み込んだものとして捉えなおしてゆきたい。そのために、政治・教育・社会運動・経済・社会・宗教・思想や美術・映画・文学・建築・造園など多様な歴史学の分野を専攻する研究者が、自分の専門領域から一歩踏み出して、近代京都の「文化」を広くとらえ直して考えてゆきたい。今まで行った、「近代京都研究」(2003～2005)「近代古都研究」(2006～10 年)「近代天皇制と社会」(2011～16 年) の共同研究を踏まえ、地域をめぐる学際的で批判精神に満ちたまとめにしたい。

This research will take modern Kyoto and culture as subjects and examine them in relation to each other. Kyoto, nowadays visited by more than 55 million people per year, is the most popular tourist city in the world. The city has been represented in such rosy expressions as “Kyoto, where the Japanese culture was created,” “the culture of hospitality,” the elegant aristocratic culture, which also became the promotional lines for the relocation of the Agency of Cultural Affairs to Kyoto. It is evident that such images of Kyoto were constructed politically and socially throughout modern times. With this in mind, we would like to re-approach the topics concerning the culture of modern Kyoto, which will include issues of marginalities such as the life of common

people, sexuality in red-light districts and problems of discrimination, and also the political significance of culture and its relations to local communities. To this end, many researchers who have concentrated on the various aspects of history such as politics, education, social movements, economy, society, religion, knowledge, arts, movie, literature, architecture, garden design, among others, have stepped outside their specialized areas and would like to rethink the culture of modern Kyoto through a broader framework.

5. 研究成果の概要

準備期間のC班と本共同研究のB班とをあわせて5年間、38回の研究会が開催された。

「京都文化」、京都イメージが、近現代を通じて、政治的、社会的に創り出された側面を追求してきた。33名の政治・教育・社会運動・経済・社会・宗教・思想や美術・映画・文学・建築・造園などの多様な分野の班員が学際的に「京都の近代史」に取り組んだ。

祇園の舞妓が明治末から文学の世界から京都表象を南蛮表象と合わせ鏡のように創り出し、安土桃山文化顕彰とあいまって、国画創作協会の活動、キリシタン研究の発展などへと広がる、大正期のロマン主義的思潮が明らかになった。それとともに京都の花街は戦前期の観光の重要な財源であることや、娼妓の売春の実態も視野に入れた。またマキノ省三の映画「祇園小唄」が文学と一体となったメディア状況で作られることや、島原を舞台にした映画が反ロマン主義的傾向にあったことも明らかとなった。寿岳文章や柳宗悦らの民芸運動、あるいは国語学者の新村出が戦時下で日本主義へと走ることも新しい知見となった。「京都文化」を相対化する問題として、室町通をはじめとする京都商人に滋賀県出身者が多かったことや、「教育的都会」である京都を全国の中高等教育から相対化したり、加賀百万石の小京都論など、京都の外からみる視点も入れられた。また谷崎潤一郎の「平安幻想」、富岡鉄斎の南画をどう京都文化に位置づけるかなど、議論は広がった。

さらにコロナ禍であったが、「京都らしさ」を文化的景観、世界遺産、「歴まち法」から守られる宇治の巡見をはじめ、向日町の歴史遺産、竹内栖鳳や富岡鉄斎の画室、佐野藤右衛門邸の桜園、吉田山の掃苔、彦根の城下町と、「近代京都と文化」を考える現場を踏んだ。京都文化博物館、向日市文化資料館、大谷大学博物館など、所外施設でも研究会を開催した。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

人文研アカデミーとして、2018 年 11 月 17 日「博物館と文化財の危機―その商品化、観光化を考える」を共催し、2019 年 11 月 10 日研究集会「現場から考える天皇制」を主催した。またシンポジウム「日清戦争と東学農民戦争」の成果を『人文学報』第 111 号に特集号として公刊した。 共同研究班「近代京都研究」(2003～2005 年)「近代古都研究」(2006～10 年)以来の近代京都研究の成果を英訳し、Kyoto's Renaissance : ancient capital for modern Japan, edited by John Breen, Maruyama Hiroshi, Takagi Hiroshi, Renaissance Books, 2020 として刊行した。また共同研究「近代天皇制と社会」（2011～16 年）の成果は、高木博志編『近代天皇制と社会（京都大學人文科學研究所研究報告)』(思文閣出版, 2018 年）として世に問うた。2018 年 11 月 17 日「博物館と文化財の危機―その商品化、観光化を考える」のシンポジウムの内容は、岩城卓二, 高木博志編『博物館と文化財の危機』(人文書院, 2020 年）として、刊行された。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

2022 年度に思文閣出版から高木博志編『近代京都と文化』(収録論文 23 篇予定）を刊行すべく、共同研究班の討論を踏まえて執筆作業にかかった。学際的な論集で、大正期のロマン主義的な思潮、戦時下の日本主義、「京都文化」を地域社会や外から相対化する論点を目指す。

本研究班で議論となった「文化」を相対化する視点は、次の「近代日本の宗教と文化」研究班（代表・高木博志、2022～24 年度）に引き継がれる。また国家や制度ではなく地域社会や民衆の心性に迫る方法も、引き続き次の共同研究班の課題としたい。